

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	無意識的生活より意識的生活への轉向
Author(s)	佐伯, 玄洞
Citation	龍南, 198: 1-10
Issue date	1926-07-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8851
Right	

無意識的生活より 意識的生活への轉向

佐 伯 玄 洞

大地の恵みと、陽の口づけに、堅い外殻を破つて、若葉が萌え出る。一雨毎に、芽立は、若人の意氣と純潔を象徴して
ツンツン伸びる。

雨が降る。シト、シト、シトと、落着いた春雨が、新緑の若葉を、洗ふて降る。溶けて、流れて行く若葉の滴りは、軟
い大地の肌の中へ、音もなく浸み込んでゆく。浸潤して行く、緑の水滴が、來春、再び大地の表に、萌え出るのかと思は
せる。

黄昏と共に、世は靜寂の帳りに、包まるゝ、多感な若き旅の子は、赤い灯の下に、頰杖をつく。何一つ音のしない、靜
寂の中に、シト、シト、シトと、降りつづく雨の音のみが、軒端を叩く。冥想するに、いゝときである。詩想は、雨と共
に、若葉の末に宿る。軒端に落ちる。大地にしみる。無限の深さへと。

天氣のいゝ日には、青葉の輝きが、宇宙にみなぎる。そして部屋の間々まで、淡緑の光が、照り映える。春は氣持のい
いときである。

日が暮れる。月の出潮と共に、待宵草が開く、叢にたゝすんで、かすんだ空に星のおどりを見る。明滅する星の群、想

ひは地上をはなれて、星の世界へと、昇つて行く。天上の世界は廣い。詩想は空逝く雲と共に飛行する。天上の世界は、夢の世界であり、詩の世界である。美の世界であり、神秘の世界である。詩人テニスン^(テニスン)は春の夜の星を歌ふ。

『輝く水仙がしぼむ頃

アウリガと、きらめくゲミニとが

榮冠のやうに

西方低く

オリオンの墓の上にかゝる。』

(テニスン)

春の夜の静寂の中に、微風のさゝやきをきゝながら、思ひは、遠くカンオペアの椅子による。哀愁と、希望のよろこびを傳へて、ジンフオニーが、限らない陶醉にまで導く。彼は更に歌ふ、『白銀の組紐の中に、もつれ合ふ、螢の一群かの如く、閃々と輝きながら、柔かな物かげから、プレイアデスが、立現はれる。』……………

ナイルの谷間に咲きこぼれて、ギリシャの都にかざられた、遠き昔の百合と、永劫の生命に生きて來た、薔薇の香から世の潮の流れが、わが身をすくひ去らんとするとき、私の心は輝かし花園(藝術の世界)に對して、限らない思慕をさゝげする。そこに流るゝ妙なる音楽を思ふ。神秘の美にうたれる。功用あるものゝ必須なると同じ程度に、美なるものゝ必須さを痛感する。だが、かゝる境地は、不幸なる現代人にとつては、恵れざる世界である、如何に夢みやうとしても、重苦しい一種の壓迫は去ることは出来ない。求めんとして求め得ざる苦しみである。

階級的對立の深刻化と、國家的鬭爭の激烈化とは、世界の人類を、絶えず幾多の悲惨なる渦の中に投ずる。飽くことなき強者の砲火は、弱者をさいなみ、目に見えざる支配者の鉄鎖は、奴隸をあやつる、かゝる悲惨なる現實は、純眞なる人間の眼にマザマザと映ずる。そして、彼等の心の奥に靜かに息づいてゐた正義觀は、根柢から動搖し始める。胸に波うつ血潮の高鳴りは、弱き者への同情と、強き者への反抗は、民族運動となり、社會運動となる。世界平和のあこがれと、人類幸福の欲求は、高くつよく焰と燃ゆる。かくして、弱小民族の解放と、被壓迫階級の救済は、現代人にとつて一つの使命となつた。けれどもそれは、餘りにも大いなる努力と犠牲とを要求する。將に地上より消え去らんとするものゝ苦悶懷惱は、クライマツクスに達する。人類生活の美しさは、跡かたもなく消滅し、最も醜い利己的な、あはたゞしい末期的努力が、すべてを支配する。そこには、何等の落着きもなければ、思慮分別も存在しない。世はすべて鬭爭と混亂の中に投ぜられる。

社會の墮落と、その末期的苦悶は、現代人の心から、美しい詩の世界を奪ひ去り、清きあこがれを蹂躪してしまつた。凄慘なる生活難の脅威は、すべての人間を驅つて、現實生活の渦中へと投じた。その昔、「藝術のための藝術」と叫ばれたスローガンは、「生活のための藝術と改められてしまつた」すべては生活の上に築かれる。生活なくして、何の政治ぞ。何の藝術ぞ。宗教ぞ。要するに、哲學的思索、詩的夢幻の追求、すべては閑暇の所産である。生活創造の途上にある、すべての邪魔物は、残らず破壊せよ。」と叫んで、過去一切のものに對して反逆の聲をあげた。生活を求むる人間は、只それのみを求むる。何と悲惨なる、世紀末の姿であらうか。

「新しいものはすべて、新しい生活からのみ生れる。在來の、眞、善、美及び之を象徵するすべては、ローマの博物館へ送れ。そして、新しい生活に出發して、新しい生活を歌へ」と。先づ人間であることを要求する、悲痛なる叫びは、絶

ゆることなく、世紀末の生活を風靡する。新生活へのあとがれと、頽廢し切つた過去への反逆は、現代人を騙つて、現實主義の荅へ送る。そして、狂人の如く叫喚せしめる。かくして、人類すべてが、消滅の坩堝に墜落し去らねば止まない。

「一社會組織の末期は、その時代思潮の混亂に徴し得る。」と云ふ。我々は、眼前に展開された、現代人の生活と思想とを見る。將に覆らんとする十九世紀以來の、思想的城廓は半傾きかけてゐる。民衆は生活の鞭に追はれて、西に東に、思想界を放浪してゆく。詩の亡骸^{ナキガタ}を抱いて荅にさまよふ。過去の時代に光り輝いた、詩の魂は去つて遠く天上にある。彼等の心を支配する不安と、哀愁は無限である。過去の生活の美しさと、樂しさを忘れ得ない、十九世紀の人間は、過去の偶像をかゝえて、追憶の夢をむさぼりながら街頭に立つ。そして、只原始的生活を求めて、求め得ずやつれ果てた民衆に向つて叫ぶ。無條件的に輸入思想を否定し、在來の宗教道德習慣を讚美して、古にかへれと叫ぶ。而かも彼等は、迷信的宗教の阿片を強制し、現實逃避の夢の中に引込まんとつとめる。遂にはそれが、強壓的手段にまで發展する。——私はその是非を云爲せんとするのではない。——併し、新しい生活の幻を求めて現生活に幻滅の悲哀を感じた、民衆はせゝら笑ふ。一度折られた枝は、元にかへることはない。彼等を氣まぐれに、過去一切を否定するとは云ふまい。描き出された、過去の追憶は、誰にとつても美しいに違ひない。けれども、生活を求むる人間のあとがれと、新しい生活への確信は、美しい追憶の夢を抱いて、さすらふべく餘りに強大である。鳳凰は灰燼よりと叫ぶ彼等は、過去一切の滅亡を叫はざるを得ない。そしてそこに、衝動生活より價值生活への飛躍と、自然意識より文化意識への進展を熱求する。彼等は今、廢墟の中に響く、建設の槌の音にのみ、彼等の生命の躍動を感じるのだ。

□

「雨に濡れ滲む電車の硝子窓から、春の夜の灯を眺むる様な、ボンヤリした思想の世界が、吾々の眼前にある。」灯を求

めて行く若人の群は多い。持ち得る限りの希望を抱いて、雄々しくスタートを切る。併し辿るべき路は只一つではない。思想の旅路は、極めて複雑である。時には、詩の女神が、黄金の槌もて心の扉を叩く。時には、唯美の綾に心の眼をくらまされる。詭辯的論理の上に立つ真理が、絶えず末梢神経の一端をつく。迷信的宗教は、困憊の極におちた彼等を誘惑する。「左せんか右せんか、我今十字街頭に立つ」と、悲壯な嘆息の聲に、疲れ果てた生の勇者を見る。感激なく生命なき暗黒の世界が、彼等の視野をさへぎる。光の所在を見失つて、遂には混亂と絶望の惡魔に魅せられた彼等は、岐路に立つて、無限の彼方に續く灰色の路を眺める。情氣満々たる世界である。

「光を求めて」と自ら叫びながら、血の滲む様な努力をつづけて來た、ヒーロイストツクな、センチメンタリストツクな人間の群は、今やダ、イストツクな旋風の中に、轉げまろぶ。生存の悲慘は、極度の高潮に達する。斷末魔の苦悶の中に錯綜する、生存への執着は、人間生活をあられもなく、醜惡そのものと化し去る。かくて人類は、懷疑の淵深く沈む。すべての生氣を失つたものは、ニヒリスツクな流れへ去る。美しい現在を生んだ過去は、ゆかしいものであり、なつかしいものである。過去へのあこがれは、現在への執着となる。過去への思慕は現在の尊敬と變化する。醜い苦難の現實を生んだ過去は、恨めしいものであり、呪はしいものである。過去への怨みは、現在への憎惡となる。過去への呪ひは、現在への憤怒となる。現實の世相に對して、尙多少執着を有するものは、肯定的基礎確立のために、盲目的努力をつづける。創造的意氣に富む若干のものは、現在のすべてを否定し去る。そして未來の世界に對して、希望をつなぐ、かくして、「光を求めて」の人類が、再び離別する。各自の立場を肯定せんとする努力は、醜い兩者の闘争を生み出す。彼等は、河の兩岸に立つて、流れの左右を主張して譲らざると、同じ態度をとる。而かも、その立場の相異を、少しも氣付ざるが如くである。かゝる現象は、唯にはらから相殺の愁しみであるばかりでなく、世界の混亂を激甚ならしむるものである。若き

生活者の困惑の原因は、こゝにも亦存するものである。

□

絶望し切つた民衆と、かくまで混亂した時代相を眺むるとき、我々の正義觀は、その根柢から動搖する。そして、遂には盲目的社會生活の必然的運命を認識する。内省思索の生活は、必然的性質を有つて、こゝに誕生する。先づ自己批判、自己解剖の要求が生れる。理想生活の實現は、自己の問題から出發するものと考へる。自己省察の内省的思索こそは、人生核心の把握こそは、あらゆる生活の根據であり、出發點であると考へる。自己認識の深さは、理想生活の基礎の堅實さと、正比の關係にある。而して、眞正なる自己認識の一端は、究極に於て、社會的存在の一端に連絡する。正確に眞實に發展した思索は、必然的にこゝまで進んで來る。個人と社會との相關性の、正しき認識のみが、正しき生活の創始であり基調である。併し、問題はしかく簡單ではあり得ない。人類に對する不幸なる運命は、盡くることなく生れ出る。

人類は、すべて各自の中に、ヤヌスの頭の兩面を含有する。相互に反對の方向に向つてゐる二面は、一致することがない。常に矛盾し撞着し衝突する。而かも、この兩者の不斷の闘争は、自然の中に生活の充實を招來する。これは、決して有意識的でも有目的のものでもない。自然なる神の配合である。併し人生の意義は、このなやみ多きが故にある。

意識的生活の把握こそは、我々の目的である。されば、我々は更に自己の深みへと突入すべきである。

「人間は肉体及び魂である」。

この簡單なる言葉は、人間生活のすべてを、遺憾なく完全に表現してゐるものと思ふ。私の意見に従へば、一方に於ては、人間のみ外的生活表面的活動を總括し、他方に於ては、その内的存在内面的生活の全部を規定してゐる。——外面的生活とは、社會的存在(社會我)を意味し、その内面的生活とは、個人的存在(自我)を意味する。——要するに、人間の生

活は、社會我及び自我の錯綜であり、交響である。前者を経と見るならば、後者は緯であり、後者を經と見るならば、前者は緯である。而して兩者の關係は、絶對不離の状態に於て、相依存するものであり、その實際的例證は、各自の日常生活の中に明白に認め得る所である。

私は今、各人の中に含有せらるゝ、外的動態のすべてと、内的存在のすべてを要約して、通性及び個性と呼ぶことにしよう。この兩者は、神の名によつて人類の首にかけられた、十字架である。エデンの園を追はれた、我等の始祖が、我等に傳へた血であり肉である。更に惱ましいことは、我等にとつて、それは一つのゴージアンソットであることである。而かも我々は、之を征服せんと欲するのである。

自我の認識と擴充とは、人間本來の欲求であり、目的であつたが、人間生活の複雑化と共に、眞實なる自己認識は、社會的の發見を招來し、やがては社會我的充實によつて、自我の擴充をはかることに考へつた。併し、之も亦しかく簡單に完成せらるべき性質のものではない。こゝに於て、更に一つのなやみが、人間生活の内部に發生した。即ち個性と通性との背馳、自我と社會我との衝突は、社會的意識を有する生活者にとつては、大いなる受難となつたのである。調和のバランスを懂るゝ心は、堅實なる基礎を要求する。常に均衡を保つことの出来ない運命の支配下にある兩者は、時には、カプリスの渦卷となり、スキラの怪物となる。

併し、かゝる状態は、自我の意識から、社會我的發見にまですゝんだ、人間生活意識の原始的状态であり、Soléの状態に止るものである。之が更に進んで、Soléの状態へ飛躍するとき、兩者の背馳或は衝突は、絶對的存在を維持するものでないことが認識される。然らば、Soléの状態に於て、兩者は如何なる關係をとるか。更に論及して見よう。

個性は相互に衝突して、生存競争自然淘汰を惹起する。而かも之と同時に、各個性の有する特性―通性―は、相依り相

援けて、以て社會的存在の維持、發展に貢獻しつゝある。この現象は、數字的明確さを以て、判然と限界を規定することは、不可能であるけれども、之は社會構成の諸分子は、單なる集合の形にあるものではなくして、有機的機械的關係に於て、存在するものであることを示すものである。いづれにしても、兩者の關係は、不可分のものであるが、こゝに注意を要することは、社會我は、個人我の特性を以て、構成せらるゝといふ考へについてである。この考へは、往々にして、兩者を主従の關係に於て、認めんとするものである。冥目して靜思するとき、兩者は必ずしも主従の關係に立つものではない。寧ろ、對立的關係に立つものであると云ふべき、性質を有する。而かも、兩者は單なる對立關係を有するに止まらず、更に依存的性質を有するものである。之は主従の關係ではなく、相互矛盾排斥の關係でもない。又時と場所とを區別して、使ひ分けらるべき、性質を有するものでもない。従つて、個人は社會に隸屬するものでもなく、社會は個人の生活手段でもない。個人を目して、社會生活の道具なりとするは、個人を冒瀆するの甚きものであり、社會を以て、個人生活の一手段となすは、餘りに偏狹である。いづれにしても、一方を以て主体と斷じ去るは、妥當性を欠く嫌ひがあると思ふ。完全なる人間生活の形態は、兩者の究極的發展と、調和に俟つべきものである。即ち、無意識の生活より、意識の生活への轉向によるのである。あらゆる羈絆と束縛から脱して、自己の意志活動のまゝに行動し得る、最高人格はここに發現する。こゝに於て、人間生活の究極は、無意識的生活より、意識的活動への飛躍であり、意識的生活の擴充であるといふ結論に到達する。これは單なる思惟による理論ではなくして、人間生活の完成は、意識的生活の獲得に基礎を置くといふ、實質の理論化である。即ち實際的性質を有するものである。而して、意識的生活の獲得は、意識的生活を生むすべての條件の把握にあり、之等の條件は、鬭争によつてのみ、把握せらるゝものである。

『生は永久の闘ひである

自然との戦ひ、社會との戦ひ、他の生との戦ひ、
永久に解決のない戦ひである。

闘へ。

闘ひは生の花である。

みのり多き生の花である。』(自由の先驅)

人間が、生れ出づると共に負はされた十字架は、目的地まで運び去るには、餘りに重いものであつた。而かも、目的地に達するために、通らねばならぬ生活の門は、その十字架を通すためには、餘りに小さいものである。あゝ、呪はれたる運命！

闘争はみのり多き、生の花である。闘へ。闘へ。全力をつくして、自己解放のために、與へられたる運命を支服せよ。要するに、人間的存在は、超克であり闘争である。精進が苦か、逃避が苦か、自分は知らない。併し、逃避は停滯を意味し、停滯はやがて退歩の前提たることを承知してゐる。而かも、否み難き生活創造の慾求は、わが胸を焦がす。されば、與へられたる路は、如何に呪はしくとも、悲しくとも苦しくとも、歩み續けるより他に仕方はない。

眞理の塔は高い。濱邊に拾ふた一握の砂は、之を足場として塔に攀るには、餘りに僅少である。だが併し眞理の窓を洩れる朝色の光は、我々の心を呼ぶ。心の高鳴りは、抑ふべく餘りに高い。

世紀末の混亂に交つて、救ひの女神が心をこめてひく、ラスト、ホープの一弦が、悲壯なる調べを傳へて響く。「人類よ起て！人類よ、起て！魅生の歡びは、闘争によつてのみ得らるゝ。未來は勇敢なる闘士のものである。」(一九二六、五、三)

(附記)

筆者の表現の拙劣さは、讀者に對して、種々様々なる印象を與へるだらうと思ふ。ふりかへつて見て、幾多の欲言不能に陥つた點を認める。かゝる粗漏なる文を、諸君の前に提示することは、甚だ恐縮に思ふ所であるが、筆者の云はんと欲する所の那邊に存するか、讀者諸君の明敏さを以て、探究せられんことを請ふて擱筆する。